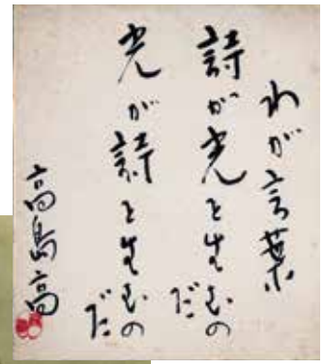
詩が光を生むのだ　高島高 詩集全集

一巻『北方の詩』一九三八（昭和十三）年
二巻『山脈地帯』一九四一（昭和十六）年
三巻『北の貌』一九五〇（昭和二十五）年
四巻『続北方の詩』一九五五（昭和三十）年
別冊「焔のように生命燃やした詩人　高島高」

別冊　焔（ほのお）のように生命（いのち）燃やした詩人　高島　高



生い立ち

日本の北のはずれの
滑川といふ小さな町に
男生まれて
詩もうたえり
泣いてもみたりき

「歴史」

高嶋家の人々（小川温泉にて）　左から、高、父 地作、母 静枝、姉 ヤス、弟 明大、母の前は妹 次子

父　地作（俳号半茶）

高と半茶翁の句碑
「蘭の香や茶の汲む水の湧く處」

半茶翁の遺稿集

高島高は、明治四十三年（一九一〇）七月一日に滑川町西町（現・滑川市加島町）で代々医業を営む家の二男として生まれた。父は高嶋地作、母は静枝で兄が幼くして亡くなったので、高嶋家の跡取りとして育てられた。

父地作は、滑川の俳諧結社風月会と親交があり、俳句・俳画を好み、小林一茶の半分をかりて、聽濤庵半茶の俳号を持つ風雅の人で、小杉放庵や近藤浩一路、郷倉千靱等の中央画壇を主導する画家とも交流があった。母静枝は教養高く文学を愛し、琴を鳴らす麗夫人であった。

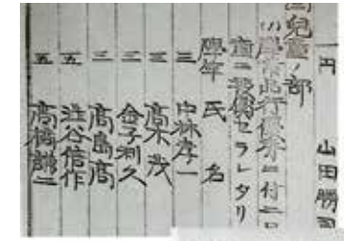
高の生まれた家は、西の宮（加積雪嶋神社）の側で、海に近く、浜に打ち寄せる波音と吹き荒ぶ海風に常に見まわれ、彼方には立山・剣の北アルプスの荒々しい岩峰が紺碧の空に聳えていた。山と海と空、そして、風という豊かな大自然の中で高の心情は育まれた。

詩作への目覚め

母は
傷みやぶれた手風琴です「母」

かなしみが
こころの底にうづくまるとき
僕はぢつと
白い手をみつめる　「影」

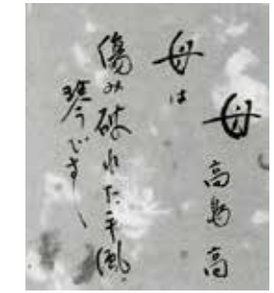
母　静枝



男子尋常小学校三年の時学業品行優秀により郡長から授賞

魚津中学卒業時の学友会誌に詩、短歌を投稿

母静枝の肖像写真の裏に記された自筆文。最愛の母を失って悲嘆に暮れながら、文学への傾斜を強めていくようになる。



自筆色紙

大正六年（一九一七）、高は滑川男子尋常高等小学校（現・寺家小）に入学した。品行方正・学術優等で尋常科三年と五年時に中新川郡長から賞状を与えられた。また、少年野球にも打ち込み、六年時には下・中新川郡内小学校争覇戦においてピッチャーとして活躍し、優勝旗を獲得した。

大正十二年（一九二三）、旧制魚津中学（現・魚津高校）に入学し、野球部と柔道部に籍を置いて活躍する。翌十三年五月に母静枝が急病死する。高の悲嘆は甚だしく、その苦しみから文学・哲学に触れ、詩や散文の創作に打ち込むようになる。母の死が高を詩人へと導いた。スポーツと詩を愛する純粋で健全な学生だったが、学友と共に編集発行した文芸誌『揺籃』が、学校側の時勢への配慮から廃刊を指示されたこともあった。

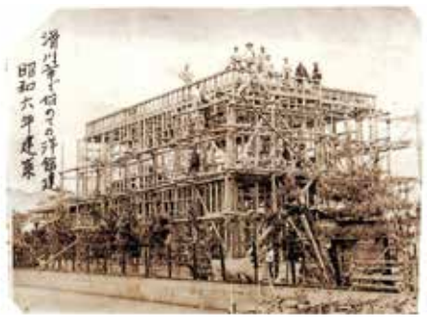
医学と詩、『北方の詩』発刊まで

肉體をつらぬく焔がある
この焔をこめて燃え上つた生命があるといふのだ
ぶつかれ　「力」

『北方の詩』自筆屏風

『北方の詩』扉

昭和医専の学生時代　白衣を着た高島高


昭和６年建築中の高嶋医院、滑川市で最初の洋館建築であった

昭和医学専門学校の実験室での授業風景（昭和６年ころ）

昭和三年（一九二八）、日本大学予科に進学し、二年後には文科に進み、詩・散文ばかりでなくコントなども冬木牧人の名で週刊誌に投稿した。

昭和六年（一九三一）四月、父地作の強い願いにより、日本大学を中退して昭和医学専門学校（現・昭和大学医学部）に入学し、代々の家業の医師への道をめざした。昭和医専は実地診療に秀でた臨床医家・実験医学を養成する専門学校だった。

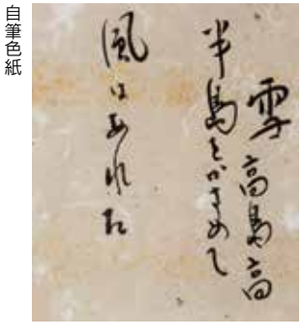
医学を学ぶ傍ら、ニーチェ、カント、デカルト、チェホフなどの西洋の哲学・文学書や、利休、芭蕉、良寛の作品を読み、感化され、昭和八年（一九三三）、詩コンクールに応募した「北方の詩」が一等当選した。このコンクールの審査員は、萩原朔太郎、北川冬彦、千家元麿、佐藤惣之助であり、若手詩人の登竜門であった。

深い思索に裏付けされた男性的で歯切れのよい高の詩が当時の詩壇に強烈な印象を与え、好評で、それが縁で北川冬彦主宰「麺麭（パン）」の同人となった。

充実した詩作の日々、そして帰郷

君は
君の中に君をさぐれ
たとへそれがあらゆる人々の非難を受ける君であつても
そいつこそがほんものなのだ
君のほんものを生かせ
暴論や無智に気をかけるな
そのものが真にほんものなら
いつかはきつと人々の方から頭を下げてくるのだ「内部」

東京生活時代の高島高



自筆色紙

北川冬彦主宰の文芸雑誌『麺麭（ぱん）』

昭和11年1月　第2回東京麺麭の会（新宿の白十字にて）　前列中央が、北川冬彦で、中列の右から2人目が高島高、北川の左が浅野晃で、前列左端は永瀬清子、後列右から2人めが桜井勝美。

昭和14年「風車陣の会」京橋の京美屋にて　左から2人めが高島高、佐藤惣之助、八十島稔、岩佐東一郎、佐藤月草、城左門らの顔が見える。

昭和十一年（一九三六）、昭和医学専門学校を卒業し、横浜市の電気局病院（横浜市磯子区）の内科医となる。勤務医としての激務の傍ら詩や評論の創作に打ち込み、「麺麭」や「風車陣」などの様々な詩会にも積極的に参加した。昭和十三年二月に高道とし子と結婚。七月に萩原朔太郎、北川冬彦序文による処女詩集『北方の詩』発刊。

結婚後も磯子区滝頭町の家に多くの詩友が訪れ、とし子夫人も加わって深夜まで詩と芸術論に花を咲かせた。高の人生で最も充実した日々だった。高島家を訪れた詩友は、佐藤惣之助、高橋新吉、安西冬衛、花田清輝、竹森一男、原田勇、浅野晃、内田巌らで、後々まで親交が続いた。

高が、その頃、共鳴していたのは北川冬彦が主唱していた短詩運動だった。短詩運動とは、日常の実感を基礎に言葉を削り、そこに生じる空間を構えて寡黙なる詩をつくることを目的としていた。当時の高の詩には〈半島をかすめて風はあれた〉などのようにその影響が多く見られる。

しかし、このような充実した日々は、長く続かなく、父地作が病に倒れたので、高は急遽、勤務先を辞して帰郷する。

応召を経て、再び詩作へと、

詩は人間を落とすものではない
詩はやはり、志であり
即ち意思であり意欲であり
魂の火花である。

詩集『山脈地帯』

戦地での想いを詠んだ俳句
「タピオカの若葉
まぶしき
窓ひらく」

戦地で高と学の兄弟が出会った時の記念写真

復員後、文芸雑誌『文学組織』を発行、現代詩の改革運動を滑川から発信する。第４集から『文学国土』と改題、「組織」は人体的組織と結成の２つを兼ねた意味を持っていたが、その領土を意味する「国土」と前進的改題をしたと述べている、昭和24年12月の第11集から『北方』と改む。

昭和15年、高嶋家の家族写真。中央が高でその左が父　地作、高の右にとし子夫人、左端の学生服姿が末弟の学。

高島高が出版した句集『鷹』と『季節の貌』

父の医院を継ぐにあたり、昭和十六年（一九四一）、離京の記念的な意味を込めて第二詩集『山脈地帯』を浅野晃の序文にて発刊。『北方の詩』『山脈地帯』の二詩集をもって、気魄に溢れ、抒情的な感情や花鳥諷詠など微塵も感じられない高島高における現代詩が確立した。同年十一月に父地作が死去する。享年六十一。

昭和十七年（一九四二）九月に翁久允主宰の『高志人』の詩の選者となり、十一月の父地作の一周忌に父の遺稿集を発刊する。

昭和十八年（一九四三）軍医として応召、フィリピン、シンガポール、タイ、ビルマと転戦し、タイにて終戦を迎え、過酷な収容所生活を経て昭和二十一年六月に日本へ生還、帰郷する。タイの収容所では、高の作詞した「復員の歌」が帰国の日を待ちこがれる収容所の元日本兵に愛唱された。

昭和二十二年十月、文芸雑誌『文学組織』を発刊。寄稿者は、第一輯では、松岡謙、浅野晃、竹森一男、山本和夫、原田勇、八十島稔、第二輯では、北川冬彦、杉浦伊作、宮崎孝政、竹内てるよ、翁久允、稗田菫平だった。第四集からは『文学国土』と改題、第十一集からは『北方』と改題する。昭和二十四年十月には句集『鷹』も発行する。

『北の貌』の発刊、尽きせぬ詩作への想い

仮面をかむると踊りたくなる
仮面はかなしい悪魔です
僕はいつまでも仮面をかむっていたい「仮面」

第5詩集『北の貌』表紙絵は内田巌の作品。序文を寄せたのは糸魚川に閑居する相馬御風。高島は相馬御風を良寛研究の先達として敬慕した。

第4詩集としてまとめたが、亡くなってから1ケ月後にとし子夫人によって発行された『続北方の詩』

寄稿した文芸雑誌の一部、詩集に掲載されていない貴重な作品が残されている。『青芝』は俳誌、『日本未来派』は高島が長く所属し投稿を続けた詩誌であるが、第66号は高島高追悼号となった。

「北方荘」と名付けた自宅と表札　「北方荘主人鷹鳴山人」即ち高島高その人である。南に面した２階の部屋からは立山連峰が一望できる。

動物を愛した高島高

昭和二十五年（一九五〇）一月、北川冬彦主宰の復刊した『時間』の代表同人となる。六月、相馬御風序、吉田一穂装幀で第三詩集『北の貌』発刊。『北方の詩』が立山連峰に託した詩集ならば『北の貌』は暗く荒々しい日本海をイメージしたものだった。十月、『現代詩事典』（飯塚書店）で高村光太郎『智恵子抄』、草野心平『蛙』等とともに『北の貌』が同年発行の詩集ベスト五に選ばれた。

翌二十六年（一九五一）六月、『日本未来派』の同人となる。八月、中野重治編『日本現代詩大系』十巻（河出書房）に、十一月には『世界現代詩辞典』（創元社）に高の詩が紹介された。昭和二十七年八月には『日本詩人全集』第六巻（創元社）に西脇順三郎、村野四郎、横光利一等とともに名が連ねられ、昭和期を代表する詩として「北の貌」が収録された。

詩人逝く、その詩は輝きを失わず

剣岳が見え
立山が見え
一つの思惟のように
風が光る

「続北方の詩」が刻まれた行田公園の詩碑、碑文は北川冬彦の筆。

上市川の辺、立山連峰に対面して建てられた詩碑。堀江野球場の側にあり、「力」が刻まれている。

昭和医専に入学した頃の高島高

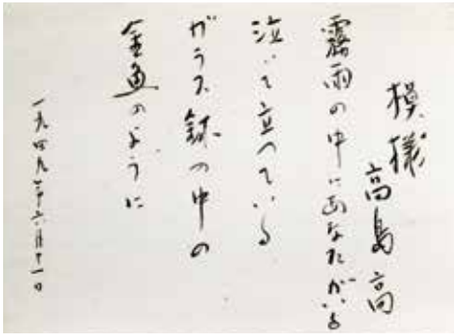
昭和二十七年（一九五二）に俳句集『季節の貌』、二十九年には詩集『北の讃歌』を手書き謄写版印刷で出版。十月には『昭和文学全集』第四十七巻（角川書店）、『死の灰詩集』（現代詩人会編）にも高の詩が収録された。だが、医者としての激務と詩作活動で、心身とも疲れ、ついに病床に就いた。

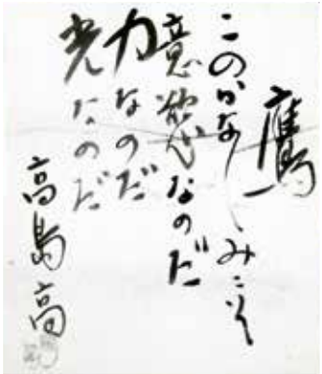
昭和三十年（一九五五）五月十二日死去。享年44。六月には遺稿集『続・北方の詩』発行。

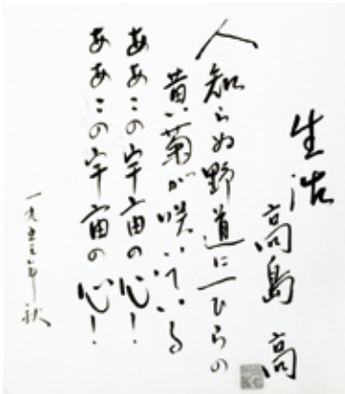
昭和四十年（一九六五）五月、滑川市行田公園内に北川冬彦の筆による詩碑建立。

昭和五十四年、「復員の歌」が鈴木典郎氏によってレコード化される。

校歌の作詞として、滑川市寺家、田中、西加積（現西部）、呉羽老田、小杉の各小学校、県立水産高校があり、「滑川市の歌」「滑川情緒」の作詞がある。





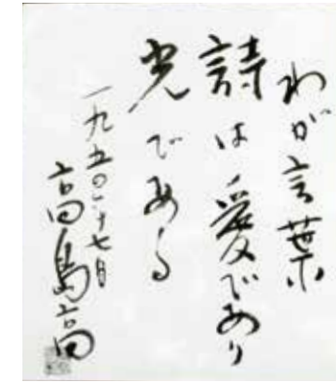


自筆色紙

高島　高を偲んで

ああいいな
さつぱりするな
山脈は純白鑞のようにきらきらかがやき
濃紺色の大空をくぎつて連つているし
巻きつ雲も素敵に刷けて光つている
（剣・立山・アルプス幕下）
そこで僕は曹洞宗独勝寺裏の
菜種畑の中の高い一本のはんの木と並び立つて
蝶々が菜種の花に静止するのをぢつと見ている
（チロル地方つて横光利一氏の欧州紀行の中では
大変論理的に描写されている）
こんな風にこんな田圃の中にひとりふるさとの
山脈と並び立つている僕を
東京の友人たちはちつとも知らないだろう
今日はあの人たちにあてて長い長い手紙を書こうと思う
菜種の花はいい花だと

※口絵の構成は、滑川市立博物館（永井正晴館長）編集『いのち輝くとき―孤高の詩人・高島高展』図録を参考にした。



自筆色紙

序『北方の詩』より

萩原朔太郎

序に代えて

高島君の事を考えると、僕はいつも鴉のような詩人的風貌を連想する。その鴉は、今この詩集の中で、北国の暗い森や、氷の張りつめた平原や、白く雪に光る山脈の上を飛びながら、ニヒリストの哀切な悲歌を歌っているのだ。しかし僕はこの詩人が、いつかその圧された意志の翼で、吹雪に向って叫びながら、一層の高い上空を飛躍し尽して、もっと太陽に近い国々の方へ、渡り鳥のように移住する日のあることを考えている。君の本当の文学は、おそらくそれから後に来るであろう。

北川　冬彦

高島高の詩は、その風貌そっくりに魁偉なものである。まるで蔵王山の雪人形のように不気味だが、しかし、あれの姿態の示すがごときメルヘンとリリックとを孕んでいる。

この作者を、新詩壇には稀れに見る男性的詩人だと、私は敢えて云う。

序『山脈地帯』より

浅野　晃

序

著者高島君、深く混沌を蔵し、凛然たるものを求めて、砕くるを辞しない。

かような人を、私は純粋な詩人と呼ぶ。高島君は純粋な詩人である。日本の新しい詩歌の時代のために戦っている戦士である。君の詩を読んで無感動な輩は恥ずるがよい。

昭和十五年八月

序『北の貌』より

相馬　御風（越後糸魚川にて）

序

私の知っている新人中の新人の一人だと思っている高島高さんが、今度詩集を刊行するについて、人もあろうにえりにえって古ぼけた老隠者の私に序文を書けと云って来た。事の意外に私はちょっとドギモを抜かれたが、しかしそこが、高島さんの高島さんたる所以だとも思い直して見た。

高島さんの詩はかなり多く読んでいたが、逢ったのは一回だけだった。高島さんが私のところに訪ねて見えた時、色眼鏡をかけていた。私を訪ねた人に色のある眼鏡をかけていた人は、これまでに高島さんだけだったような気がした。

しかしその時私は高島さんと話しながらふと思った。

「この詩人は色眼鏡の奥から透明に自然や人生を見

ているんだな。そうでなければこの人の肉眼はあまり透明すぎるか、又はこの人の眼には自然や人生はあまりに光線が強過ぎて眩しさに堪えないのかも知れない。」と……

それから又私はこんなことも思った。

高島高！上から読んでも下から読んでも同じ高島高だ。おそらくこの詩人は真直に立っていても、また逆立ちしても、同じように自然と人生を直視し得る人かも知れない。珍らしい人だ。と……

高島さんはせっかく勢込んで訪ねて来てくれたにも拘らず、一こう変った話もせずに、極めて平凡な訪問者のようにして帰って行った。

高島さんはお医者さんだ。そのことはかねてから知っていた。しかし何科のお医者さんだか、私はついうっかりし、人にも聞かず、高島さんにも訊ねなかった。そして私は独ぎめにあのお医者さんは「精神外科」というような専門家かも知れないと思った。しかし或る時また私はあの人は「内科」を「外科」し「外科」を「内科」する魔法医者ではあるまいかとも思った。蓋しそんなことを私に思わせたのは、高島さんの詩が私の頭にこびりついていたからだ。高島さんはやがて応召されて外地に行った。そして時々たよりをくれた。その便りにはいつもきまって良寛を思うということが書いてあった。高島さんは戦争に行っても、戦争のことよりも良寛のことを思っていたらしかった。からだは軍隊にまかせても、心は良寛に委せていたのかも知れない。

高島さんの詩を読むと、私はいつもその感覚の新鮮さに、表現の敏活さにうたれた。しかも高島さんは、その近代的な新鮮な感覚を以て、かの芭蕉の寂びをしつこいほどに求めている。

いつか私は高島さんに頼まれて茶室の額を書いた。この新世紀的な詩人が茶室を持っているということは、一層私をよろこばした。

寂然とただ独茶室に坐って、時にボードレールの「悪の華」の詩篇を口ずさみ、ヴェルレーヌのあのデカタンな小曲をほれぼれと口ずさんでいても、少しもそれが矛盾を感じさせない、そういったところに詩人としての高島高の無類のいいところがあるようにも私は思った。妙法蓮華経普門品第二十五をヴェートーヴェンのソナタの曲にあわせて読誦しつつも、この詩人の魂には独自の妙境が現像されているにちがいない。

暗い日本海の「北の貌」に直面しつつその渦巻くあらしと波の間に、南の海の凪ぎ渡った静かなさびしい歓びを心ゆくまで味わい得る高島さんらしい。

詩集『北の貌』のプリントの原稿を読ませてもらいながら、私は一種の不可思議な世界に案内されたような驚きと歓びを感じた。

夜と昼と、東洋と西洋と、中世と近代との間の「トワイライト」「宗教」を「芸術」せんとし、「芸術」を「宗教」せんとする一個の巡礼者の幻影。そんなことをも私は考えた。

「北の貌」は南に向いている。そしてそれは頭背を北に向けている。きびしく寒いあらしの中に、ほの暖い春風が綿々としてつきざるメロディーを奏でている。

ふしぎな北の貌だ。

仮面をかむると踊りたくなる

仮面はかなしい悪魔です

僕はいつまでも仮面をかむっていたい

と「北の貌」の詩人はうたう。しかしその「仮面」はおそらく吉崎の面のように肉附きであるかも知れない。そしてそれは鬼の面でなくて、ただの人間の、詩人としての高島高さんその人の面に外ならないだろう。「原始」の底に「文明」をさぐり、「虚無」の底に「一切」をつかもうとするこの詩人の求道の歩みは、無明の扉をまさに開こうとしている。

詩集『北の貌』はむろん多くの人々を驚かすであろう。私は自分の住んでいる北辺のこの地の近くに「北の貌」の詩人の住んでいることを一つの誇るべき歓びとするに躊躇しない。矛盾即統一、混乱即調和の境に生きんとする奇怪な新時代の詩人高島高さんが、旧時代生きのこりの私如き老隠者に敢えてその詩集の序文を需めた謎も、どうやら少しずつ私の心の中で解けてゆくようだ。

昭和二十二年二月十一日

吉田　一穂

序　詩

空に祝祭の星は燭れり
落葉に径も埋れたり
村邑の灯は乏しきかな
地に湧きて泉はひとり歓語くなり

内田　巌

詩　盃（高島さんへ）

この盃を友と飲む
　えにしのひだの
　　空のしわ
　風景は光にかげる　追憶の日ともならまし
まひる時　そのまひる時
　盃のかち合う気配
　こぼれゆく私語の一片
　金色の音ともならめ

『富山文芸』昭和二十八年四月十日より

（『麺麭』一月号「杉」改題）昭和十三年一月十七日

高島　高

焦土より（散文詩）

暗い十坪の土地には、どんなことがあろうと決して日が当らなかった。何年間そこにじっと生きていたのか、一本の杉の木がただひとり囲りの煤けた古い灰色の建物の壁を、長いこと眺めて暮していた。なまあたたかい風が頭の上をかすかに揺るがせて肌が柔らかくなって来ると、彼は眠りから覚めたように、春だ、春だと、驚喜の声をあげた。――又、右手の尖塔の窓ガラスから反射して来る眩しい光がちらちらと目を射、夜になってまん丸な大きな月がじき頭の上を通り抜けると、彼は夏になったと知った。高い高い窓に銀河が一刷毛ながれて無数の星があざやかに輝いている。急に空が曇って横なぐりの雨が、彼の四周の建物の樋を劇しい音を立てて流れはじめる。と彼は、秋が来たんだなと思った。軽い溜息がその唇から洩れた。ふと、身体の底つめたく重苦しいのに気がついて彼は真夜中目を覚ました。死んでいるように沈黙した建物のガラス戸に白い雪が振りつけて、わずかなこの土地も白く覆われていた。その時には、彼は地の底から呻くような絶望の声をあげて叫んだ。冬だ。冬だ。日は決して当らなかった。もうとけるだろう。もうとけるだろう。彼は寒そうに佇立したまま毎日のように考えた。けれども雪はなかなか消えなかった。かえってその愚痴に痺れた頃に、二度目、三度目の雪が容赦なく降っては積り、降っては積りした。彼はちょっとの間、たのしい追懐に引き入れられて行った。冷めたい冬もやっとこの春と交替したとき、雪が毎日目に見えるように低くなって行った。彼は雀躍りした。もう大丈夫だぞ。春が来たんだ。河岸の柳もあおくなったろう。

街路の鈴懸も目覚ましい緑色になったろう。田の菜種も輝くように美しい黄金色になったろう。彼の心は、それらの友だちを思うだけでも波打った。それがどうだろう。今は、もう十二月にも近い。またあの暗い冷めたい淋しい冬がやって来るではないか。知らぬ

間にじりじりと間断なく、攻めよせて来るではないか。――積った上につもり、その上にまた雪が降り、長いこと一番うわ皮が埃で黒くなって、もうどんなことがあってもこの雪がとけないと一度は思われたが、春のめぐみに何時の間にか消えて、雪のつもった痕かたもなくなってしまって、今度こそはもう、そんな冬なんか決して来ないだろうと思われそうだったのに――おお、その恐しい冬がまた這いよって来るではないか……。しらちゃけてどんよりとした太陽が薄い雲の層を通して倦怠しきったような光を高い建物の尖塔に投げかけていたある日であった。外気はつめたかった。足もとからこみ上げて来る寒さを彼はこらえていた。彼は冬を呪詛することに倦んでいた。（なんという無味乾燥な反復だ。自分は何度この退屈を繰りかえしたら救われるのだ。）長すぎる生！それは反復にすぎないではないか。反復することより逃れることの出来ない、焦ら立たしいさびしさを自覚してそれでいてやはり反復しなければならない自分を顧みて、彼は頭を石にでも思うさま打ちつけたいくらいの焦燥を感じた。それは、いく度考えてみても、たまらない侘しさであった。何故か――彼は考えた。このやるせないさびしさはいったいどこから来るのか――しかし彼は不意に現われて来た闖入者によって瞑想を破られてしまった。猫だ。猫は黒い身体と黒い尾をながく伸ばして底意の知れない陰剣な白眼で眺め廻した。が、どうしたのか落ちつかなげに見えたその黒い動物の身体は間もなくマリのように飛んで消えた。すると――そのあとはまた、今までのような、そして未来永劫に変ることはあるまじいように見える十坪の暗い土地であった。もう雪が降るのであろうか。冷たい建物から折り返して撫でる風は彼の襟元のあたりをひやりとさせた。沈鬱は、けったるさは再び非常な勢で彼を襲って来た。彼は目を瞑じた。じりじりと地の底にめり込むような気がすると、ふッとささやかな黄色い幻像が目の裏を右往左往した。と、更にその幻像の中から砂のように小さな一つの追憶が生まれた、それは瞬く間に自分の心を抑しつけるような大きなものになった。彼は冷汗をたらたらと流して周章てて目を開けた。それは春の静かな一日であった。雪がすっかりとけきってゆえ知らぬ喜びと、そしてまた来るべき遠い冬を思い

出して暗い顔つきをするのにふさわしい、どんよりとした日であった。夜も朝も昼も夕も、ただ掘り出された過去の建物のような、静かなこの建物にかこまれた陽の当らないこの土地にどこをどう間違えたのか、またどうしてそんな運命を与えられたか、彼は、自分の足もとに思いもよらぬ蒲公英の育ちつつあったのを発見したのであった。そのことは彼にとっては恐しいことであった。自分の存在と共に、あり得べからざる彼女の、運命の神にもてあそばれた、あまりに皮肉な姿を、しかも思いがけず自分と同じ境遇の中に突然彼女の姿を見出したからである。

彼女の若い力は華々しい緑の光を発揮していた。われただ一人あることの矜持をできる限りみせようとてか、彼女の無邪気らしい呼吸は、思わず生に絶望した彼にさえ、固唾をのませるくらいであった。

彼は彼女の努力を笑えなかった。空虚な自分にどうして彼女を嘲笑えよう。自分にもそれはあったのだ。自分の若かった時、燃えるような野心と欲望を持って劇しく自分の路をきり拓こうとしていたとき――けれど落ちつく所は同じだったのだ。自分の存在、その価値、その使命……彼は涙いっぱいの目で彼女を眺めた。その間にも彼女は日増しに大きくなって行った。けれど顔色はそれに反比例して蒼ざめて行った。それでも、とうとう花を咲かせる時は来た。しかしその時は最初のあの勇ましかった呼吸さえ乱れて苦しげに聞えた。それもそのはずだったろう。彼女の完全の成長のために必要だろう太陽も恋人も決してこの暗い十坪の土地にはやって来なかったから。花が咲いた。――なまあたたかい南の風のほとぼりもさめてまた倦怠にみちくるだろう一日が始まろうとしていた時、いじけた顔を無理に歪ませるようにして、彼女は微笑した。彼は気の毒そうな顔つきをして言った。

「蒲公英よ、とうとう花を咲かしたね……だが……。」

「けちつけるなら止して頂戴。」

彼女は急にうって変ってつんとした。不遇に育ったもの特有の意地わるそうな顔をまざまざと浮べて、黄色い声で叫んだ。

「お日様のお出になる頃になって御覧。そうすりゃ、あたしがどんなに綺麗だかわかるから、あんたのように、痩せた身体を無理やりに伸ばそうなんてこと

は思ったことのないあたしなんだからね。」
努力したものは、その結果がどうであろうとその努力を口にしがちなものだ。誰でもだ。
彼はそう思った。優しい声で言った。
「まあ、お待ち、蒲公英よ、ぼくのことについて言わないでおくれ。ぼくだってただ、蚯蚓に煮え湯を浴びせたように、だらりと伸びようとは決して思っていないのだから。ところで、お前は花を咲かして、それからどうするつもりなのだ。」
「生意気お云いでないよ。神経衰弱……そんな先のことまで……あたしたちは花を咲かせて、子供をこしらえて、それだけだよ、それでいいんだよ。それから先は神様の領分なんだからね。」
彼は彼女の無智に、涙も出ない切実さを感じた。
「蒲公英よ、お前の待っている太陽は……いいかね。お前の恋に焦がれている太陽は、今までと同じようには、もう決してお前やぼくの所へはやって来ないだろうよ。」
彼女は彼を見上げた。そして彼が本当のことを真面目に語っているのだと知ると、急に泣きくずれた。はげしいすすりなきが長いこと続いた。
（待っているもので、それのやってくるものがないのだ。）
彼は悲痛な面持で、誰えとなしに独語した。……
彼の果敢ない長い追想が急に破られた。そのとき、その建物の二階の長い廊下のガラス戸が重い響きをたててぎこちなく開いたからであった。——ぬっと蒼いはげしい容貌の若い男が首を出した。その男の髪の毛はちぢれて乱れていた。男は性急に力のない咳を二つ三つした。そしてぎっと彼を見下ろした。みるみるうちに双眸からは玉のような涙があふれ出て来た。
その夜、古いシンボルのようなこの建物は一面の火の海にとりかこまれていた。燃えしきる強い劇しい音響は間断なく聞えて、人々が如何なる方法を講じてもなかなか消し止めることが出来なかった。それは勿論、この暗い十坪の土地にまで及ぼされた。杉の木は突然目に映じたこの紅焔に、胸の湧きあがるような喜悦を感じた。が、直ぐ淡い恐怖に襲われた。けれどそれも長い時間ではなかった。その次には、嘲笑したい気になった。ざまあ見ろと思った。建物はその間に

も、物すごい響きを立てて崩れて行った。
（燃えろ……燃えろ！）
彼は腹の底から呻った。しかし、彼は熱と煙のために呼吸が苦しくなった。生を失うことのはげしい恐怖が彼の総身に押し寄せた。けれどもそれもまた直ぐにとんだ。だんだん愉快なよだれの出るような、くびれるような快感が骨の髄までえぐって行くようだった。間もなく彼は静かに瞑想した。目の裡には、益々明るい華やかな、嬉しい何ものかの幻像のようなものがぐるぐると廻った。
（これで古いものは終ったぞ。おれの生命も、今終るんだ……けれど、過去の何ものにも災いされない新しい生の芽生えがこの焼跡から迸り出るのだ！）
すると、彼は独りでに口ずさんだ。まるで他人ごとでもあるように……
杉はさびしくはないだろうか
古い——大きい杉は
困憊と疲労の汗をながしながら
浅みどりの小法師を掌に舞踏させる
お前は早く疲れた若い男だ
夢と幻は黒くひからびて
お前の背中にこびりついている。
ああ氷雨が降るような
しかし、その瞬間、彼は目が廻って息苦しくなった。次第次第に呆として来た。左手の建物が崩れかかって来た。彼は恍として夢に入りかけた。

敬愛する郷土の先人『富山新聞』より

昭和四十一年二月八日・九日

郷土の自然と対決した高島高氏

現代詩への殉教者

――県内ではじめて詩碑立つ――

「剱岳が見え　立山が見え　一つの思惟のように風が光る」

雪の帽子をかむって、郷土の生んだ昭和の代表的詩人高島高の詩碑がふるさとの滑川市の行田公園のかたすみにたっていた。詩碑がたったのは昨年の五月十二日。高島高が涅槃（ねはん）の人となってから満十年。高島高の詩業をたたえ、そのヒューマンな人柄をしのんだ地元の滑川市、門弟、富山県内の詩人たちの心の海鳴りのようなこだまによって詩碑はたてられたのである。

除幕式には日本の代表的な詩人北川冬彦氏も出席、若葉をもれる光りの中で家族の手によって除幕のひもが引かれたのであった。黒みかげの石に北川冬彦氏の揮毫によって高島高の詩が刻まれ、その作者のおもかげをしのばせるように高島高は大自然の中にどっしりとたっている。

この高島高の詩碑は富山県内でははじめての詩碑であることにも心をゆり動かされるであろう。句碑や歌碑はそれまで数えきれないほどあったが、詩碑はひとつとしてたたなかった。このように俳人や歌人は尊敬されても詩人は白眼視されがちな精神風土の中で、現代詩が根をおろすことは必死のことであった。高島高の魂はその燃焼の激しさのあまり、わずか四十四歳の短い人生の中で燃えつきたのである。その意味で富山県の現代詩のために、人生をたたかいぬいた殉教者であったといえよう。

しかし、この詩人高島高を生み育てたのも郷土であることはいうにおよばない。高島高は明治四十三年七月一日滑川市加島町の医師の家に二男として生まれた。この高島医院は代々うけ継がれてきた漢方医で、ヤケドの特効薬の名医として知られ、父地作は俳句、美術、こっとうを愛し、俳号は小林一茶の半分をかりて半茶と称する風雅の人でもあった。母静枝もまた教養高く、文学を愛し、琴を鳴らす麗夫人でもあり、高島高の心の底のメルヘンは母の琴の音と物語りによってはぐくまれたようである。高島高の絶唱ともうたわれる「母は　傷みやぶれた手風琴です」は、高島高が多感な中学生時代に失った母への慕情の結晶であったが、これも当時の思想弾圧のあらしの中で、特高によって冷風にさらされたのである。

高島高は二男として生まれたが、長男は幼くして死亡したため、家を背負わなければならない宿命をかみしめなければならなかった。旧制魚津中学に進んだ高島高はからだも大きかったため、柔道や野球も得意で、とくに野球はピッチャーをつとめた。この高島高の力投で魚津中学は夢の球宴、甲子園の土を踏んだことも郷土の人には忘れられない印象である。

スポーツマンだとばかり思っていた高島高が詩の世界に足を踏みいれたのは、父半茶の影響からでもあったろうが、魚津中学時代机を並べていた現富山大学文理学部哲学教授島崎藤一氏に俳句とも詩ともつかない作品をそっと見せていたのがそのはじめ。美しく、やさしかった母がなくなってからは文学への傾斜がはげしく、昭和三年上京日大予科に入学し、二年後には文科に進む。昭和八年萩原朔太郎、北川冬彦、千家元麿選の詩コンクールに「北方の詩」が一等当選、昭和詩壇にデビューした。昭和十年から北川冬彦主宰の『麵麭』に同人として参加。しかし父のすすめで昭和医専に移り、昭和十一年同校を卒業。横浜で病院に勤めるかたわら詩作をつづけ昭和十三年七月、萩原朔太郎、北川冬彦序文の処女詩集『北方の詩』（ボン書店）を出版、日本の詩壇で確固とした地位をかためた。

しかし、父の病気で、うちに文学への情熱を秘めながらも昭和十四年帰郷、父のあとを継いで郷里で開業、医師としての生活のかたわら郷土の風土に根をおろした詩作がすすめられてゆく。

北ア、北海を絶唱

――人生へつきぬ愛の詩魂――

郷里で詩作をつづけていても高島高が有名な日本的な詩人だとは、郷里の人はほとんど知らなかった。

それを知っていたのは、高島高の行動を監視してい

る特高ぐらいであったという戦前の皮肉な現実が、そこにあった。

高島高の詩風は北川冬彦氏が『日本詩人全集』でいっているように「その烈しい詩精神は北方の雪と氷の山脈地帯との対決において凛然たる」ものであり、詩法は「〝詩と詩論〟〝詩と現実〟に発した〝新散文詩運動〟の流れをくむもの」であったが、高島高の詩は北アルプスを真向かいにみ、太古の光りをはなつホタルイカの群れる海につつまれた滑川市の郷土をぬきにしては成りたたない。

モダニズムの開花した昭和詩壇において、高島高のいちずに郷土の自然と対決した詩は、それだけにユニークな存在として輝いているのだ。

また高島高の風容も、彼の詩を語るそのものであり、萩原朔太郎は『北方の詩』の序で「鴉のような詩人的風貌を連想する」といい、北川冬彦氏は「まるで蔵王山の雪人形のように無気味だが…メルヘンとリリックとを孕んでいる…稀れに見る男性的詩人だ」といっている。

このように、その風容は暗い北国の風土を背負った大きな山のようであった。

しかし、外見の大きさにくらべ高島高はあまりにも、やさしい愛の心の持ち主であった。

相馬御風が『北の貌』の序文で「この詩人は色めがねの奥から透明に自然や人生を見ているんだな。そうでなければ、この人の肉眼は、あまりにも透明すぎるか、また、この人の目には自然や人生は、あまりにも光線が強過ぎて、まぶしさに、たえないのかも知れない」といっているほどだ。

だから心が、すぐ苦しくなるのか、いつも高島高は心臓のところを指でおさえるので、チョッキに穴があいていたと、とし子夫人は語る。

また高島高は戦後も時代おくれの車夫を使っていたが、これは車夫の身の上を心配してからだ。というし、医者として地域の人たちに、病気で倒れるまで献身的につくしていた。

彼は聴診にかけては、神秘的なほどの才能を示したのも、詩の内的世界の声を聞く才能と、あい通ずるものがあったからだろうか。

また人間だけでなく高島高は動物を愛した。幼年時代父にかくれて茶色の犬を飼っていたが彼がかけていた色めがねの色も茶色であったことはふしぎな結びつきといえよう。

死ぬ直前でも捨て犬を飼い「拾」と名づけて、かわいがっていたという。「動物を愛さないものは人間でない」と、いい残している。

このように北の海をうたい、四季の立山、剱岳をポエジーの翼にのって駆け、深夜の海のホタルイカの神秘をうたった詩も医者としてつくした人生も、人間の自然への永遠の愛でつらぬかれていたといえよう。

昭和十五年竹森一男らの『旗』同人となり内田巌、坂田徳男と知り、昭和十六年浅野晃序文で第二詩集『山脈地帯』（旗社）を刊行したが、昭和十八年応召、フィリピン、シンガポール、タイを転戦、昭和二十一年六月復員、栄養失調がひどく歯もいため、この戦争でうけた肉体の打撃が強く、健康をそこない、また生死の間をくぐってきてからは利休、芭蕉、良寛らの求道的な日本の伝統的詩人の詩精神にしだいに近づいていった。

昭和二十二年十月日本文化の魂の再建を主張して『文学組織』（のち『文学国土』）を郷土で創刊、松岡譲、竹森一男、原田勇、八十島稔、浅野晃、北川冬彦、竹内てるよ、古谷綱武、高橋新吉、深田久弥、滝口武士らの参加を得、また県内から高島順吾、沖野栄祐、坂田嘉英、稗田菫平、野村玉枝の作品ものせている。

県内詩壇では『逍遥』『ｓｅｉｎｅ』『詩の谷間』『二人』などの詩誌を指導し、『高志人』詩壇の選者もつとめ、県内詩壇につくした。

昭和二十五年相馬御風序、吉田一穂序詩で第三詩集『北の貌』（草原書房）を刊行、高村光太郎の『智恵子抄』草野心平の『蛙』などとともに昭和二十五年度詩集ベスト五に選ばれる。

同二十五年から『時間』同人、同二十六年『日本未来派』参加、死去するまで発表しつづけ『日本未来派』六十六号は高島高追悼特集となっている。

高島高の詩は河出書房の『日本現代詩大系』角川書店の『昭和文学全集・昭和詩集』はじめ多くの詩集、詩誌に収録されており、高島高の詩歴は現代詩が不毛であった富山県に高く輝きその足跡は、あまりにも大きい。

高島高は昭和三十年五月十二日肝臓ガンで突然永眠したが、彼のつくった滑川市寺家、田中、西加積、富山市老田、小杉町小学校の各校、県立水産高校の校歌はいまも愛唱され、その詩人の魂が県内詩人の血の中に生きひきつがれている。　（執筆は野島清治氏）

『とやま文学』第四号（昭和六十一年）より

金子　忠雄

高島高先生の文芸活動

――思いつくままに――

一　詩について

高島先生の詩活動は、戦時中南方へ軍医として従軍された、昭和十八年～二十一年を境に、およそ前後十年ずつとみてよい。

詩集の初見は、昭和七年ごろで、昭和医学専門学校（現昭和大学医学部）に在学中のことである。

詩集1『太陽の瞳は薔薇』がそれで、発行年が記されていないが、序文を寄せた白銀繁生について、昭和九年七月号の文芸と映画の雑誌『オアシス』に、「白銀繁生を悼む」を寄稿しているところから、この年以前に詩集1が刊行されたとみられる。

この九年には『地平線』『日本詩』にも「速力」「母」「影」「海辺」などを発表しており、翌十年には、中央詩壇に認められた記念碑的詩集『北方の詩』（B6判十九ページ非売品）を刊行された。

続いて詩集2『ゆりかご』同3『うらぶれ』が相次いで出されている。

東京での生活は、昭和三年から十二年間、年令でみると十八歳から三十歳ころまでで、多感な青年期であり、人生で最も充実した時代であったろう。

しかし、詩には青春のロマンや、甘美な内容のものはほとんどみかけない。

昭和十三年、さきの小冊子『北方の詩』をもとに、新たな詩作を加え、上製本として本格的な詩集を刊行された。

この詩集から「北」や「冬」「雪」などのついた標題を拾ってみよう。

「北方の詩」「北方の春」「北方の秋」「北方の冬」「北の貌」「北海」「冬景色」「北方的風景」「雪山の思い出」「冬の北海回想」などが挙げられ、詩文中に「北」や「冬」に関連した字句をみると、「意慾」に北へ吹く風ばかり、「胸」に北風すさぶ、「亜寒帯の唄」にはいまに雪がふるだろう、「村の中」に北の方へなどがある。

このような傾向は『山脈地帯』（昭和十六年）にもみられる。

北ぐにの厳しい大自然を舞台にして、力強く男性的詩風をもってうたわれており、『北方の詩』にそれが著しい。そしてこれが東京遊学中の発表であることに注目したい。

戦後の昭和二十五年、詩集『北の貌』を刊行する。

この『北の貌』には、ふるさとの具体的には滑川やその周辺の地をうたった作品が眼につく。

「海辺にて」――あるいは生きる――橋場の突堤の灯が……、生れたふるさとに生き、ふるさとに死ぬ……「故郷挽歌」この停車場の古風なことは……「歴史」滑川という小さな町に……「北アルプス」私はこの故郷の田園を……「小駅待車」水橋口駅、富山電鉄電車、滑川町の側面をながめるにも……「人生」霙（みぞれ）の滑川の停車場道を……「途上にて」山加積あたりから滑川にやって来たのだが……「晩秋歌」滑川から中加積までの……「宇奈月旅情」「山の療養所」黒部川に……「蜃気楼」これこそ滑川海岸のもつ夢と感受性の中に……「蛍烏賊」滑川という越中の小さな町の……

昭和二十九年六月『北の讃歌』を刊行したが、翌年五月先生は没し、遺稿集『続・北方の詩』と改題されて出版された。

この『続・北方の詩』にも『北の貌』のように、やさしく暖かな眼指（まなざ）しで、ふるさとや身近な人々をうたっている。

『続・北方の詩』の掉尾（ちょうび）を飾るのが「春と滑川」で、

ああいいな　さっぱりするな

ではじまるこの詩は、剱・立山はきらきら輝き、雲も素敵に光っているのである。

戦後、親鸞、良寛に一層傾倒し、自宅の部屋毎に仏像を安置、「死んだ者は一人もない死なざるものがあるのだ」との高橋新吉の賛のある観音像の軸を常に掛

け、自らは「仏陀――闇をみきわめて、しづかに坐しておはします」と色紙に揮毫（きごう）した。

「初期の近代的詩風から後期は東洋風の人生的詩風に移った」（『日本近代文学大事典』講談社）といわれているのも、これらの作品の流れをみるときうなずかれるのである。

三十代でありながら、老成された如き風貌と詩、物に感動し、傷つきやすいやさしい心とともに、常に強い意志と深い信仰心を秘めておられたのは、病身であったがための先生が到達した生き方ではなかったろうか。そして詩風の流れにそれがはっきりと表わされているように思う。

二　文芸雑誌『文学組織』の発刊

郷里での文化活動は『高志人』各号に詩、随筆、詩評を寄せ、地元の俳誌『凡人』の選者を務め指導するほか、雑誌『逍遥』をはじめ詩雑誌に次々と寄稿されたが、これらは昭和二十四年がピークであった。

昭和二十二年十月、文芸雑誌『文学組織』を自ら編集発行する。

高島先生は、後記に次のように書いている。

「一年前から計画したが、三年あまりの南の旅の疲労のためと、生活のわずらわしさのために遅れてしまった。……

十三年間の東京生活より郷里に移り住んでから早や八年。光陰実に矢の如し。この間『麺麭（ぱん）』をはじめ、いくつかの雑誌を彷徨して来た私も、新しくこの『文学組織』により、真に生きたいと考えている。……」

『文学組織』は、第四集から『文学国土』と改題、十一集からは『北方』と再び改題され、第十二集（昭和二十五年六月）で終わっている。

寄稿者には、古谷綱武、坂田徳男、高橋新吉、浅野晃、山本和夫、北川冬彦、竹森一男、竹内てるよ、室生とみ子、翁久允ら多彩な顔ぶれが揃っていた。

しかし、高島先生の詩活動の環境については、弟学氏が遺作展に寄せられた一文からもうかがえるように、必ずしも十分ではなかったようである。

「兄は周囲から当初理解されず、あんまり賞めたものではないと蔭口を聞きながら、詩は人間を落とすものではない、詩はやはり志であり即ち意志であり、意

欲であり、魂の火花であると自らを鼓舞し、あくまでも一すじの道を貫徹しました。……」

文芸活動に対する周囲の無理解、「詩を作るより田を作れ」という空気のなかにあって高島先生は苦悩の日々が続いたに違いない。

三　俳句に親しむ

昭和二十一年十月、敗戦後の食糧危機・インフレのなか、滑川町の凡人詩社は、戦後第一号の『凡人』を復刊した。

滑川風月会は、明治十九年に結社され、大正年間『風月之友』と題した俳誌を刊行していたが、大正十二年三月から『凡人』と改題した。高島先生の父地作氏（俳号半茶）は、風月会の重鎮であった。

戦前の『凡人』に、高島先生の名がみえるのは、管見の及ぶところでは昭和十三年新春号に載せられた、迎春と松の二編の詩のみである。

高島先生が『凡人』に本格的に関わるのは、戦後の第三号（十二月刊）からで、選者として登場された。

この年六月、南方から復員され、体を癒やす間もないときであった。

「選をさせていただいて」に、次のように述べている。（一部抜すい）

「俳句は詩であり、特に抒情詩であるという立場から、あくまで創造的文学でなければならぬと思う意味で、今度の句を選びました。非常に五七五の口調がよくとも、概念で書かれたものはやはり低く、その意味で俳句は心の文学だということができるのです。……」

二十三年一月の『凡人』に俳句時評をのせ、二十四年秋の仲秋名月観賞会に出席、その後の『凡人』は欠けていて分からないが、昭和二十七年の年頭句会に、先生は久方振りに出席し、終始熱心な指導と助言を与えたとある。続いて二月、三月、四月と句会に出席、選評を行っている。

高島先生が俳句に親しんだのは、東京の生活時代（『季節の貌』跋文―）で、それまでは、つれづれに日記のかたわらに書き入れる程度であったが、やがて詩人俳句雑誌『風流陣』に拠って作句された。

『風流陣』は、昭和十二年九月、詩人北園克衛が創刊したものである。

「一時句作がとだえたが、それ以後『ゆく春』に発表してきた」（前掲『季節の貌』）とあり、戦後は『ゆく春』に拠ったことが分かる。

『ゆく春』は、室積徂春が昭和二年十月創刊した俳誌で、高島先生の句がみえるのは、二十二年四月陽春号からである。

以後、二十四年十月北海号まで八回四十句を投句しておられる。

このころの先生の心境は、俳句によって表わされていないだろうか、孤独感や何か満たされない気持ちをみるような気がするのは、当時の混乱した世相からくるものだけではなさそうである。

昭和二十四年十月、句集『鷹』を、二十七年には『季節の貌』を自版、一九五句と一三八句をそれぞれ収めている。

四　遺作展の開催

昭和五十八年夏、滑川市立博物館で「ふるさとの詩人　高島高展」の題のもとに先生の遺作展を開催した。

展示を計画した段階で、果して作品が集まるかどうか不安がないではなかったが、多くの人に親しまれていた先生のことだから、市内に相当数が保存されているものと楽観していた。

生前の先生と親しかった人たちを訪ね、いよいよ作品を収集することになると、意外と少ないことが分かり、いささか慌てざるを得なかった。

医院を継いでおられる、とし子夫人や令弟学氏からも、ご自宅に展示するだけの作品が残されているかどうか危惧されている様子であった。

かくするうち、お宅から電話があり、たくさんの作品がみつかったとのことで、早速お伺いした。

二階大広間に数百点もの作品が、足の踏み場もないほど並べられていた。

全部を展観したかったが会場のつごうもあり、親交のあった詩人の色紙なども含めて、およそ百三十点ほどお借りすることになった。なかには、詩集や句集に無い作品もあった。

このような多数の作品を、いつ書かれたのだろうか、医師という多忙な職を持たれ、町の文化事業に参画されていたことを考えると、夜半も遅くなってから筆を執られたのではなかろうか。

ご家族も知らなかったようである。

どの筆跡も、実にのびのびとおおらかに書かれている。

博物館には連日多くの市民が訪れ、大きな感動を与えた。また、小学生から老人に至るまで数十の感想文が博物館に寄せられた。

『名作選高島高詩集』刊行のきっかけも、このような雰囲気のなかで生まれたのであった。

五　むすびに代えて

私は高島高先生にお会いしたことはない。

先生の亡くなられた昭和三十年春、私は滑川市役所に奉職し、やっと腰を落着けることのできた年で、郷里滑川について疎かった。

北陸の小さな町滑川、雪に埋もれたわびしくも厳しい冬、戦後東京から移り住んだ私にとって、いろいろな意味で疎外された存在であった。

東京へ戻りたいという気持は、戦後しばらくは続いた。

高島先生のいう「東京生活時代は、今から思えば、ただただなつかしきかぎりである」との気持は、私にはよく分かる気がする。

上京の機会を期待しながらも、いっぽうでは、東京を遠く離れたところでの詩作の限界もどかしさを感じながら「これから人知れぬ田舎で腰を据えて、ゆっくり人生などを見つめたいと思っている」と、今の環境を素直に受け入れ、諦観（仏教では真実をみつめる意でタイカンだが、ここでは一般的な意味でのテイカン）にも似た心境をも語っている。

「二度裏切られた人間は、永久に人間を信ずることが出来ないものであろうか、春の宵。散る桜。人生を呪うことのいかにかなしきや。永遠の闇の中にすら、いつか神は光を与えるであろうか」。『文学国土』（第四号後記）

「怒ったこともなく、疑うことを知らない人、それだけに裏切られると一人悩んでいたようです」と、とし子夫人はいう。

これからは、医院を弟学氏に引継いでもらい、詩作に専念できると喜ばれたのも束の間、純粋な心の詩人は、昭和三十年五月、病に倒れ、四十四歳の若さでこの世を去ってしまった。

（滑川市立博物館元館長・滑川市）

「越中文学の情景」『北日本新聞』より

平成二十三年七月十五日

立野　幸雄

風土に根差したロマン

時を経て言葉・詩の輝きに気付くことがある。体験を重ねて初めて分かる言葉・詩の真実がある。五十歳後半に病に罹り、死を覚悟したことがあった。その時、ある詩が急に光を放ち、感動と安らぎを与えてくれた。「火の中では火になりきり／水の中では水になりきる／喜びの中では喜びになりきり／悲しみの中では悲しみになりきる／その究極は無であり／無から再びあらためて力がほとばしり出す／一度死んでから／本当に生き出すんだから／あわててはいけない／早まってはいけない／何も世におそるることなど一つもないのだ／その本質さえ究明すれば／死さえも／瞬間にかがやく永遠／光は無限にかくされている」（「人間」）。

幸いに病は癒え、それ以来、この詩が胸の奥底で熱く息衝いた。改めてその詩集を読み返した。そこには命の光が溢れていた。「わが言葉／詩が光を生むのだ／光が詩を生むのだ」と。そして、故郷の自然が鋭い感性で猛々しくうたわれていた。「飢えている海のむこうは暗く壁画のように唖黙ったまま不安げな眉を寄せ合っている。冷えた灰。灰の屍。白い歯等は組み合いつ噛み合いつ砕けに砕けちるであろう／皮膚病の海は皮膚病の治癒に近き落屑期の粗面がむずがゆいのであろうか。絶え間なく落屑の上には落屑が積み重ねられてゆく……／沈んだ廃園。死面。手……」（「北の貌―親不知附近の未明」）。彼は孤高の貌の下に繊細な神経を秘め、不退転の決意で勇猛果敢に詩の道を邁進していた。その詩は詩魂の雄叫び、魂の火花で、時として深い信仰心に裏打ちされた安らぎも漂っていた。彼とは「日本の北のはずれの／滑川という小さな町に／男生れて／詩もうたえり／泣いてもみたりき」（「歴史」）とうたった高島高で、詩集は『北の貌』である。

高島高は明治四十三年滑川町西町（現滑川市加島町）の医家に生まれた。旧制魚津中学（現魚津高校）を卒業後、文学に志し日本大学の予科、文科へと進むが、父の強い願いで昭和医専（現昭和大学医学部）を卒業。

在学中から詩作に耽り、昭和八年に若手詩人の登竜門である詩コンクール（審査員・萩原朔太郎、北川冬彦、千家元麿、佐藤惣之助）で彼の『北方の詩』が一等入選。それを縁に北川主宰の『麵麭』『昆侖』の同人に迎えられ、十三年に『北方の詩』を刊行。だが、家の事情で帰郷。医業の傍ら詩作を続け、十六年に『山脈地帯』を刊行。十八年に応召、軍医としてフィリピン、シンガポール、タイを転戦し、二十一年に復員。郷里で文学再建の旗を立てて二十二年に『文学組織』（後に『文学国土』『北方』と改題）を創刊。『時間』『日本未来派』同人としても活躍し、二十五年に『北の貌』を刊行。だが、健康に恵まれず、三十年に死去。享年四十四。その後、三十年に『続・北方の詩』、五十九年に『名作選高島高詩集』が刊行された。

『北方の詩』が立山連峰に託したものならば『北の貌』は暗く荒涼たる日本海をイメージしたものであろう。前者では北国の山々を力強く男性的に歯切れよくうたい、後者では滑川周辺地と身近な人々を優しく温かな眼差しでうたいあげている。序文は相馬御風である。風土に根差したロマンが胸を打つ。代表作は『日本現代詩大系』第十巻、『日本詩人全集』第六巻、『昭和文学全集』第四十七巻、『死の灰詩集』に昭和期を代表する詩として収録されている。若き日に中央詩壇で注目を浴び、田舎に逼塞後も詩への情熱を失わず、故郷の山河を雄々しくうたい続け、揺るぎない独自の詩風を築きあげた高島。彼の詩を通して故郷の風土の中にロマンを見い出したいものだ。

（富山県立図書館長・富山市）

高島高君の思い出『富山新聞』より

昭和四十年四月五日

島崎　藤一

北の空に美しい光りを放つ

医師であるとともに、詩人として知られていた高島高君の碑がこのほど郷里の滑川市に建てられるという。これを機に、不思議なほど鮮明なかたちで、私の中に残っている高島高君の思い出をつづってみる。

君と私との間には時をへだてて三たびの交渉があっ

た。最初は中学時代のことで、二人は魚津中学での同級生だった。とりわけ親しく交わったのは三年から四年にかけてのころであったようだ。一、二年のころの君はむしろスポーツマンで、野球や柔道が得意であったようだが、強度の近視のせいでもあったろうか、三、四年になるとスポーツへの君の関心はうすくなり、文学への愛好が君と私とを結びつけたものらしい。

二人は龍之介や武郎や啄木の作品をむさぼるように読んだ。お互いに貸したり、借りたりしあったそれらの本の間に、ときには、ヴェルレーヌの詩の一片や、君の手になる詩の小品や短歌がひそかにはさまれていたこともあった。いまから考えてみれば私はたわいのない幼稚な文学少年だったのであろう（実際私はその後、別の道を歩いている）が後年発揮された君の文学的天分はすでに、このころからその萌芽を見せていたのかもしれない。君の生家は医院で、そのころはいまよりもっと海岸寄りの波よけの石がきにかこまれた古い家であった。当然家業をつぐべき運命にあった君が、文学への情熱に身もだえしながら、その苦哀を訴えたのも、吹きすさぶ北風に、波の音の高く響いてくるその医院の一室であった。

中学の四年を終えて、私は金沢の学校へ移ったので、君との交わりはそこで切れたが、中学五年になってからの君の文学活動には目ざましいものがあったらしい。校友会誌への寄稿や同人雑誌の発行など多彩な活躍を通じて、文学への君の傾倒はこのとき決定的なものになったらしく、中学を卒業した君が、日本大学の文学部へ進んだというわさを私は金沢にあって聞いている。

四、五年の空白の後、昭和六、七年のころ私たちは東京で第二回目の出会いをした。意外にも君は日大を中退して、家業をつぐために昭和医専に入学していた。どのような事情でそういうことになったのか私にはわからないが、多分芝の三田の近くに君は下宿していたように思うが、その下宿の一室で、やむを得ず家業をつぐが、文学は捨てない、詩は私の一生の伴侶と熱に浮かされたように語りつづけた君を忘れることができない。東京の学校を出た私は、やがて関西の方に勤めることになって東京を離れるのであるが、思うにそのころから君の詩の天分が中央の詩壇でも認められはじめていたのではなかったろうか。片山敏彦氏の知遇を君が語っていたのもそのころだったように記憶している。

戦後私は富山に帰り、三たび君にめぐりあう機会にめぐまれた。昭和二十六年ごろのことだったと思うが、所用で滑川に出向いたついでに君の現在のお宅を訪ねた。戦時中応召になって南方へ出ていた君もこのころは滑川で医業に従いながら（火傷の治療については君は特別の技術を持っていた）いよいよ詩への情熱を燃やしつづけていたようである。上梓されたばかりの詩集『北の貌』をさっそく寄贈してくれて、〝詩想〟ということについていろいろと語ってくれた。詩は表現を第一とするものではあるが、その根底にある詩想を大切にしなければならないと君は説いた。『北の貌』のあとがきの中でも「私は詩を愛している。しかし詩を思う心を更にこよなく愛している」とも君はいっている。日ごろ論理の文字をもてあそび、概念のみになじんで、詩を解する感受性の乏しさを嘆いている私にも、それら文字の背後にあるものを大切に育てている君の人間的な高さはじゅうぶんに理解できた。同じ『北の貌』のあとがきの中で君は「詩は人間を落すものではない、詩はやはり志である」ともいっている。

君の詩を生む母胎は、激しい原始の生命の息吹きを内にひめながら、深い湖のような静けさと透明さの中に、自らを純化し高揚させようとする君の魂の燃焼であったのだ。このひたむきで純一な全人間的な魂の叫びが珠玉の文字をつらねて、君の詩となって花ひらいたのであろう。しかし、この時が君との出会いの最後であった。

君のすぐれた魂は、ひとときの北の空に美しい光芒を描き、きらびやかな詩の花をまきちらしてやがて消えていったが、いたずらに馬齢を加えている私は、すぐれた友の残照の中に、ただ思い出をなつかしんでいるのみである。

（富山大学教授・哲学・富山市）

『名作選　高島高詩集・付録』より（昭和五十九年十月十五日）

高島　順吾

風花の舞う夜は遥かに

——高島高さんを偲んで——

詩作品はもちろん、詩を書く心すらすでにファッション化しているように見える昨今、高島高さんは詩は人生であることを身をもって示すために、四十四年の生涯を急がれたように思えてならない。

詩人逝って早くも三十年近くの歳月が流れている。そう、あれは昭和二十四年の早春のことであった。一夕、高さんを魚津の拙宅にお招きしたことがあった。詩人はお抱えの人力車に乗り、早月川を渡って訪ねてこられた。そして歓つきぬままに一泊していかれたのであるが、今も思出によみがえってくる懐しい一夜である。

〈そのころ高さんは戦争中に中断されていた詩活動を再開され、詩誌『文学国土』を主宰されていた。私は十年若輩の二十八歳、北園克衛のＶＯＵクラブに所属してシュルリアリスティクな前衛詩人を気取り、詩誌『骨の火』を出していた。二人の詩の傾向は自ら異なっていたが、どうかすると現代詩以前の因習的詩風に圧倒されがちな郷土に、若い詩人たちと新しい文学思潮を生みださねばならない、という主張では大いに意気投合していたのであった。〉

ところでその夜、二人はどんなことを談じ合ったかは遠い記憶の外に没し去っているが、いまも強い印象に残っているのは、その席で詩人が色紙に筆を走らせた「天衣無縫」という奔放自在な筆勢のうちにも深い愁いを漂わせた墨痕そのままの酒座の姿——それはすなわち真に詩を生きる人間の風格であり、人間の存在そのものの根源を哀しむ哲人を偲ばせる姿に相違なかった。が、その中、興のたかまるに乗じて私たちは女房と共に人通りも絶え、街灯の明りもうすぐらい往来にでて踊り始めたのである。いや、踊ったというのは正確ではない。高さんと家内とが互いに肩に手をおき「カチューシャ可愛いや別れの……」の唄を声ひくく歌いながら、せまい道路を前後左右にゆらめきつづけたのであった。

ちらちらと風花が肩に舞い落ちる、まだ春浅い夜の三人の詩人祭であった。——今日、こんな「詩人祭」を見ることもなくなってしまった。詩人たちは皆んな余りにも利口になってしまったのであろうか。

〈付記〉お葬儀に列したのち、二、三の詩友が浜四ツ屋の小森典氏宅（故人が晩年もっとも愛した焼酎「銀泉」本舗であり、私の父の生家でもあるのだが）で改めて高さんを偲んで句会（？）を開いた。その時の句らしきものが後日富山新聞の学芸欄紙上で披露されたのには一同困惑したが、記念のためあえてその一部を紹介しておく次第である。尚、その席に坂田嘉英君がいなかったのは、浜四ツ屋への途中、彼は襲いくる寂寥の思いに抗しきれず、再び高島家に引返して、ひとり深い酒中の喪に服していたからであった。

雲表をゆく鷹の行方 Oyashirazu　高島順吾
夜鳥か春の暁雲まだ見えず　小森　典
春なだれ大音響「鷹」の行方　沖野栄祐（故人）
ささやかな酒宴に厳し北の貌　亀田　晶

坂田　嘉英

追慕抄

○

「この〝焦土より〟は僕の古い作品だけど、僕には大切な散文詩なのだよ。僕がいなくなったら、君は責任をもってこれを保存してくれなくては困るよ……」

一見豪放で実は非常なテレ屋の先生がその時、どうにも弱ったはにかみ方をごまかすような顔を、空に向けたまま大きく笑った。その笑いの一瞬前に、先生の眼が眼鏡の奥で僕に光った。晴れた春の終り、富山日赤病院の裏の空地の一本道で。

二年後、突然本当に「いなくなったら」が来るなど、その時僕は思いもよらなかった。

○

「先生はいつも僕の所へ来て下さるけど、僕はすっかり詩は駄目で……」僕は恐縮ばかりしていた。

「君が詩を作っていたら、僕は君の所へ来ないかも

知れないよ。君までがむつかしい話をしたら……」
昭和二十九年霰の街でふと洩れた、先生の心の疲れを僕はさとれなかった。

○

応接間には大てい角ビンがあった。僕は当然僕のためにあるように飲んだ。休診日でない限り先生は、次第に怪しくなる僕に素面でむかい、看護婦さんが患者の来訪を告げて扉を開けても、生返事のような返事の仕方で先生の腰は上らなかった。診察室で待つ人のために、僕はうるさく催促し、そんな中での楽しそうな先生の笑いが僕に嬉しく、ビンが空になって僕は帰った。

○

「君はいつも気にかけるけど、あれは僕のためにしているのだよ。患者に対した時から僕は命を預かるのだから。人間の命を預かる心の準備の、あれは僕の時間なのだよ」ひとり言のような先生のつぶやきから、医師としての詩人の、愛への厳しい誠実に僕は打たれた。この一面を僕は十年私淑していて知らず、一ヶ月後、先生は亡くなってしまった。

○

先生の詩碑が建った。発起人諸氏のご苦労があり、先生の親交あった人々のお力添えがあった。それにもまして地元市民の誠意のこもる援助があった。この詩碑の偉大さは碑石の大小ではなく、先生を慕う市民の層の巾の広さにこそある。

○

詩碑は建って日毎に僕は虚しい。生者の死者に酬いる、所詮は生者を慰やす心の宴。還るはずのない先生の笑いは見えず、遠い世界の涯を吹く白い風に僕は頭を吹かれているしかない。

――昭和四十年六月刊「北日本文苑」――

註＝「焦土より」は先生が永く筐底に愛し、二八・四「富山文芸」に掲載、冒頭の言葉と共に同誌を托された。

氷見　庄治

光いのちにみつる

光いのちに
みつるとき
ことごとく
天地
あたらし

「光」にはいろいろの意味がある。光るもの、光線などの他に、希望という意味もあれば、光明という意味もある。光明というのは仏の心身から放たれる光のことである。そしてこの光には明かるさと温かさがある。明かるさは仏の智慧を、温かさは仏の慈悲をあらわしている。

このように光には、希望から生きとし生きるものの、生命をはぐくむもの、無明のやみを照らすもの、という広くて深い意味がある。

『滑川の人物誌第二集』に高島高を載せることになり、その執筆を担当することになったのは三年前である。現代詩についての知識も造詣もないものが、小学生のための読みものとはいえ、詩人の伝記を書くことは大変なことであった。

それでも、それでもと思いなおしながら、この詩人の生涯とその作品にとりくんだ。さいわい、ご家族の方々をはじめ、多くの人々のご協力で、漸く、本当に漸く書きあげたのが滑川市教育委員会発行『滑川の人物誌第二集』の、ふるさとをうたいつづけた詩人、高島高である。（これが機縁で本書の年譜を担当させていただくことになった。）

高島高の求めつづけたもの、それは冒頭の詩「光」にまとめられているように思う。漱石に、チエホフに、ベートーベンに、宮沢賢治にひかれ、芭蕉を慕い、良寛に思いをよせて、そして禅寺で座り、書くことによって求め続けた心境が、この光の詩にあらわされているように思う。

感想文

二九通のなかから一部をご紹介します。

○自由で自然で現代の詩です。（市内　57歳　男性）

○郷土にこのようなすぐれた詩人がおられたことを非常にうれしく思いました。（市内　28歳　女性）

○滑川市の生んだ偉大な詩人高島高先生の作品を、大変興味深く観賞させていただきました。書もとても好感がもてました。（市外　46歳　女性）

○今更ながら偉大な人物とおどろいています。校歌、自筆の原稿に胸がせまり、新しい発見をしたような感じでした。（市外　39歳　女性）

○感激しました。特に「北方の春」が好きです。来てよかったとつくづく思います。（市内　15歳　男性）

○たいへん感激しました。「手」がよかったです。（市内　14歳　女性）

○「し」を書いた人は、えらいと思う。しぜんを書いた「し」がたくさんあったので、見てよかった。（市内　7歳　女性）

○隣人の詩を見て感無量。若き日の先生を偲びて。（市内　63歳　男性）

○このような宝物を見れてうれしい。私は高島高という詩人を今日初めて知った。「自分の感情をストレートに出している」とか……いろいろ感じた。これからもこのような宝物を展示して欲しい。（市内　14歳　女性）

予約申込みから

あの当時でも珍らしかった人力車に乗って、往診に来て下さった先生の柔和なお顔は、希望の丘の校歌と共に鮮明です。

加島町　浜田宏子

ふるさとの詩人　高島高展（昭和五十八年）

髙嶋　学

「展覧会に寄せて」

……

兄は周囲から当初理解されず、あんまり賞めたものでないと蔭口を聞きながら、詩は人間を落とすものではない、詩はやはり志であり即ち意志であり、意欲であり、魂の火花であると自らを鼓舞し、あくまでも一すじの道を貫徹しました。しかし萩原朔太郎氏のお言葉「意志の翼で、吹雪に向って叫びながら、一層の高い上空を飛躍し尽して、もっと太陽に近い国々の方へ、渡り鳥のように移住する日のあることを考えている。君の本当の文学は、おそらくそれから後に来るであろう。」に答えるのであろう兄の光の詩への志（第四詩集『続北方の詩』で試行か）は病魔のため、そのエネルギーも燃えつきて、立山の中空へ消え失せました。従って御高覧に供する作品数があるか危惧しましたが、幸いにも此の機会がなければ、そのままうずもれたであろう数多くの遺品を見付け出すことが出来、今更の様に兄の巾広い交友関係を知り、又文学へのひたむきな情熱、気迫を感じとる事が出来ました。

兄は生前部屋毎に仏像を安置せずには居れなかったのですが、「死んだ者は一人もない死なざるものがあるのだ」の賛のある高橋新吉氏の観音像の軸を死ぬまで掛けていました。

色紙、短冊の一部の俳画風の絵は、兄が泰国での抑留生活中、同隊の洋画家から手ほどきを受け、復員後初めて画き出しました。

その泰国に私が駐屯すると兄が思いもかけず単身訪ねて来てくれ、感激の対面をしました。その後私の師団の転進に際しバンコックで二人の別れの写真を撮りました日に終戦になりました。抑留中兄の作詩した「復員の歌」が私の部隊に伝わり、毎日歌いながら復員の日を待ちました。昭和五十四年十一月岩手県水沢市の鈴木典郎先生（眼科医院長）が郷愁の歌をもう一度ビルマ従軍兵士の胸に甦らせたいとの御希望があって、プライベート盤を自費で作製していただきました。又兄の生家や詩碑をビデオに撮って戦友会で披露するのだと彦根市から戦友の方々が御来滑になりました。恩師北川冬彦先生には詩碑除幕式に、又浅野晃氏、今は亡き深田久弥氏、竹森一男氏がわざわざ遠路より拙宅を御弔問下され、遺族一同感涙致した次第であります。

……

（抜すい）

『とやま文学』第四号（昭和六十一年）より

髙嶋とし子

夫　高島高の想い出

書は体を表わすといいます。夫は字が下手な事は自他共に認めていたのですが、患者さんから「先生何か書いてもらえませんか」と所望された事がきっかけで筆も墨も選ぶことなく、気が向くと、さらさらと、詩、俳句、仏語等を天衣無縫に、てらうことなく、自由奔放に一気に書き上げました。ある時夫の余り知らないはずのお茶の先生宅の茶室に「月の詩」が掛けてあって驚いたことがあります。その書体に不思議に温かい心のにじみが感じられました。

体は大きく武骨者のように見えましたが、本当はお洒落で、実にデリケートな神経と温かく深い愛情と童心を失わず持っていた人でした。外出の時は帽子をかぶったので洋服の内ポケットに鏡と櫛は何時も入っていました。

弟の長女美紀子が生れた時（昭和二十二年）赤ん坊を見に行くのにどこで見付けたのか可愛い色の金太郎飴が十本程入った袋を持って行きました。当時は食べるものにもこと欠く頃で、金太郎飴など買えるとは思いもよらない時代でした。それに生れたばかりで口にするはずもないのだから、その誕生を喜ぶあまりの夫の心からの贈物だったのでしょう。又東京の友人宅を訪問した時大嫌いな鰻丼を美味しい美味しいといって平げた夫でした。それは相手を喜ばせようとして無理に美味しそうに食べたのではなくそのような時には本当に美味しくなってしまうのです。健康が優れなくて往診は人力車に乗っていました。優しい人でしたから患者さんにも大変親切でした。特に信頼して遠方から来院された方から「先生の診断はいつもレントゲン以上に正確で先生の神経は凡人のわからぬ境地迄らくらくとお見通しになったのでないでしょうか」と述懐されたことがあります。

庭にも思い出が一杯あって、いつの日からか庭を友として日に何回も雨の日は傘をさし庭下駄をひっかけて俯き加減に行ったり来たりしながら、さながら石や

草木と語り合っているように見える姿がまざまざと浮かんでまいります。休みの日は周りが田圃の小さな地鉄水橋口駅（今は西滑川無人駅）から富山へ行くのが楽しみで、よく坂田嘉英さんのお宅にお邪魔した様です。そんな時道端で見付けたれんげ草やクローバー、尾花を庭に移し植え、尾花は黒竹と並んで今も増えもしないで秋になれば花が咲き、又椿の花が好きな時期があって上市農園へ行く毎に買って来ました。「利休が好きだったんだよ」といって「侘び助」も植えました。これはあまり大きくならず庭の隅にあって早春一重の赤い花が侘しげに咲きます。特に三十年三月の黄疸になって食物が通らなくなって苦しい時、五色の蔦を植えたくて実家の母に探してもらい、自ら苦しいのに庭に出て燈籠の横に植えました。この蔦を見る度どうして死の直前にあのように急いで植えたかったのか、その心情が未だに理解出来ず考えてしまいます。

五月十二日風雨が強く窓を打つ音と、夫の可愛がっていた犬パールの悲しい泣声のする夜半四十四才の生涯を終えました。夜が明けて気付くとパールはいません。いくら呼んでもすがたを見せず、とうとう帰っては来ませんでした。

死の十日程前から臨終の近い事が町の噂になったようで田中小学校（校歌「希望の丘」を高木東六作曲でつくる）から録音機を持って来られ「先生の声を録音なさいませんか」といって下さいました。苦しみがひどくて、とても言葉にはならないと思いましたが、本人がするというのでお願いしました。氷を口に入れて出にくい声をふりしぼるように出す様子はいたいたしく、と同時にその真剣さに心うたれ厳粛な気持にさせられました。

亡くなる約一日前の録音の言葉

「人の生涯には必ず困難がつき纏うと思いますから信念と誠実を以って生きれば如何なることも克服されると信ずるのであります。努力と言うものは一層大切なものと信ずるのであります。」

さすがに言葉づかいにはみだれは見られますが、生命の終るいまわに、子どもたちに言い残したかった思いが、切々と感じられました。

夫の死後十年目に沢山の方々に依って詩碑が建ち、また最近遺墨展が滑川市立博物館で催され、名作選高

島高詩集が出版されました。
　これらはひとえに「詩は志なり」の信念を変えず、常に努力し、誠実に生き抜いた賜でないかと想っています。

「詩人高島高逝く」『高志人』より

中山　輝

日本詩壇の損失

　あの元気だった高島君が死んだ、ときいて仰天した。ほんととは思えない。
　高島君は僕と同じ魚津中学出身で四、五年か下級だが、知ったのは二十年前くらいだ。彼が横浜にいたころ詩の会合にでていたのを友人の詩誌で知り、僕の長兄（中山中）に似て面白い名だ、と思った。間もなく郷里滑川へ帰り、詩誌を出したり、詩集を出したりして名を売りだした。処女詩集をだしたとき僕らが富山で祝賀会を開いてやったが、本人は都合が悪くなったとかででて来なかった。そのとき特高刑事がその詩集をもってきて「この男は赤でないか」という一句があった。詩の中に「母は破れた手風琴」という一句があったので、母をこんな風にみる男は赤だろうというのである。僕が母をいとしむ詩だと説明したら特高氏「なるほど」とわかってくれた。あとで高島君にこのことをいったら眼を細くして喜んでいたっけ。その後、彼は心臓障害で倒れ、僕にぜひあいたいといってきたので、新年号編集の忙しい大年の日の朝かけつけたところ、面会謝絶、絶対安静という。ちょうどお父さん（医師）に注射うってもらって仰臥していたが「中山さん僕はもうダメだ。生じっか、科学者なので自分の身体を一番よく知っとる」という。大声一番「生意気なこというな」と叱りつけ、いろいろと話を進めたら「楽になったから」と起きだし、玄関へ送りだしてくれたのに驚いた。間もなく南方へ召集され、こんどは豪傑みたいに肥って元気になって帰ってきたのに驚いた。一昨年、七高〇君の詩集「輪転機」出版祝賀会を富山荘で開いた時、彼もメートルをあげ「こういう先輩をもって弱るね」と愉快がっていた。あの時の記念写真では僕と腕をくんでいたのだが、一人で不帰の旅へいってしまった。
　高島君の詩は明るい、清閑なスタイルで北国人特有の憂愁といったものを底にたたえ、静かに人生のノスタリジアを歌っている。富山県が生んだ詩人としてこれから大成する人だった。もっとも近年は枯淡に宗教的な味を帯びた詩を書き、年に似ず老成じみた印象を与えていたが、何か死を予感でもしていたのだろうか。僕は彼の作品よりも、彼の詩論といったものにより多く佳さを感じていたのだが、そういう点、篤学的なところがあった。多作でなく多読であったようだ。惜しい人を失って人生無常の感にたえない。
　滑川は二十数年前に抒情詩人伊東潔を失い、今また高島高君を失った。単に滑川市の損失でなく、日本詩壇の損失でもある。いい後継者ができることを念ずる。

吉沢　弘

悼高島高君

　死去の通知を受けた時うすら寒い気がした。突然のことに驚いたのである。
　そういえば何だかこのごろ病気だということをきいたような気もする。あの肥った体で酒も好きらしいから突然の死もうなずけないではなかったが、それにしてもいささか茫然とした。
　大事な人であったという気持。もう少し交際っておけばよかったという気持。自分より若いのにという気持。その人を惜しむ気持であり、真に故人を悼むという気持であった。
　君に初めて逢ったのは、終戦後十二年して私達の短歌の集りで藻谷六郎追悼の会をやった時であった。その時、他にも同じく追悼の催があって合同したのであるがその中に君もあったのであろう。
　名は知っていたが逢ったのはその時初めである。そ

の後、顔を合すこともあったが語り合ったのは近年魚津市で北陸医学会のあった折、遅く会場へ来たのに挨拶したのが始めの終りだったように思われる。

その時一度訪れるつもりで、道順をきいたりしたことも覚えている。君は名刺を呉れたが、会場に遅れてくること。名刺を呉れることが或は君の癖であったのかもしれない。

弱々しい詩人の型でなく、その詩のようにガッチリした偉大な体と不逞な面魂をもっていた。しかもその中に実にやさしい美しい魂を蔵していたのであろう。そのことはかんたんな言葉の端にもあふれていたし、あの取りつきにくいような顔の中にもかくされないであらわれていた。もしアルコールでも少し入ったら面白いことになるのだろうと想像された。そうした機会もなかったではないのだがそのことなく過ぎてしまった。

昨年であったか雄山通季がさる祝宴の席でれいの如く酔って君と肩をたたき合って大いに語ったらしいが何が何であったやら次の日ポケットの中から高島高の名刺が出て来たという便りを呉れたことを思い出す。

誰れ彼れから噂もきいたりしたが確でないし思い違いもあるかもしれないので書けない。

高志人の随想に「竹」のことが書いてあった。「竹」を愛し、いろいろの竹を庭に植えているというのであった。

竹を愛するのは風流人のことであり君子人の心境である。私はそこに奥床しさを感じ、一度その庭を見たいものと思っていたのである。

さきごろ魚津高校の新築落成を記念した同窓会報のようなものを手にしたのであるが、その中に昔の魚中時代の思い出を書いた君の文章があって君が同じ魚中の卒業であり、私より十数年も後輩にあたることを知って今更驚いたのであった。

私の友人の書いた追悼の文に「年下の人の自分より老成した人と話すのは苦手だ」という意味のことがあったが君は私に取ってもそのような気のする人であったかもしれない。もっとも深くつき合えばそんなことを感じさせない人であっただろうけれども。

君の詩のことは、不勉強にしてよく知らない。詩集も読んでいない。詩人仲間らしい人の哀悼の文章の中

に北方に向う心の底に流れる南方の血の温さを指摘し真に北方人として大成する日を期していたというようなことがあったと思う。よくわからないが君の血はやはり温かったのであろうと思われる。

いつか訪ねるつもりが果されず遂に何も彼もみんな心残りのことになってしまった。

翁　久允

弔　詞

高島君、

まさか、こんなことになろうとは夢にも思わなかった。十二日の朝、新聞社から電話がかかったとき、ほんとかいときき返した位だった。君から幾度もハガキで今度こそは、今度こそは必ずゆくと言って来たから、そのうちに君のあの山でも動いてくるようなからだが私の前に現われるだろうとばかり期待していたのだ。それなのに今、私は君のあのやさしい笑い声も人なつこい笑顔と共に見ることもきくことも出来ない写真の前で涙にぬれているのだ。

高島君！君は一口で言ったら「ほんとにいい人」であった。それは君の純情がいつも君の顔に口に手に足にそしてからだ全体にみなぎっていたことで誰でも感ずることが出来たのだ。そうした純情の中から君の詩は朝から晩まで湧いて流れていた。だから君は生れつきの詩人だったのだ。四十四年の生涯は短かいように思われるが、しかし、君は純情な少年として生き通した詩人なのだから普通の人間よりもずっと長生きしていたわけである。人間高島高の姿は消えても詩人高島高の詩は永遠に生きているわけだ。だから私は今、人間なみに君の死を悲しんでいるけれど、実は君を死んだ人とは思われないのだ。

誰だって人間なら一度は必ず死んでゆくに間違はないのだが、死んでも死なない人間と、死んだきりの人間とがある。君はその死んでも死なない人間の一人だ。話そうと思うとき、君の詩集を手にとって繙(ひもと)いたらそこへ君がぬうっと現われて来るに違いないからである。

とは言うものの今、ここに君と最後の別れをしようとて集っておられる悲しい人々の雰囲気に浸っていると胸の底からぞくぞくと湧いて来るさびしさである。「高島君」と呼んでも、もはや人間の声を出して「おい」と答えてくれない君に対して、私はやはり悲しいのだ。眼に浮んでくるのはいつも腹のふくれた古いカバンをぶらさげながら身装などには少しもかまわないで人の命を救おうと飛び廻って歩いたあのお医者さんの姿である。又、時として静かに机に向って瞑想していた詩人らしい姿である。更にお茶やお酒の席で感激したり笑ったりして寛ろいだ君の姿が、今となっては、君は煩わしいこの世の生活をさっさときりあげて、魂ばかりの如来と共に定住することが出来るようになったことを祝福する外に何もないのである。しかし、しかしだ。後に残った私にしてみれば、殆んど毎月君からおくってくれた高志人への詩や随筆の原稿がもう再び郵便に依って配達されないのだと思うと糸のきれた紙鳶を追う子供のような心もちにもなるのだ。又、昨年君たちによって結成された滑川市の高志人会支部にゆくと言っても、君がいないとなれば、何か必要なものが欠けているようで淋しいのだ。

こうした愚痴な悲しみを捨てて静かに瞑想を凝せば君は既に永遠なる如来の寂光浄土に荘厳なる仏と化しているのだ。そこには七宝の池があるだろう。八功の徳水が満々と流れているであろう。君が讃美してやまなかったベートーベンの音楽以上の天楽が絶え間なく奏せられているであろう。そして君の慕い求めた芭蕉や利休の寂びの世界はそこなのだ。そうした安々とした世界に今君がおちついたと思うと、その君にただ合掌して冥福を祈る外ないのである。

左様なら（五月十四日）

斉藤　吉造

弔　辞

高島高君、四十四年の間最も親しい友として語りあって来た僕達が十二日の午前零時を限りに、幽明の境を異にし、今僕はこうして君の柩の前に立って、弔辞を読まなければならない運命にある、高島君、これが人生と言うものであろうか、君は僕達を残して逝ってしまった。君のあの温容、君のあの心にしみわたる様な言葉も、もう二度見る事も、聞くことも出来ない。今僕の胸に溢れる悲しみ、これを断腸の想というのであろうか、高島君、僕達は幼い頃から本当の竹馬の友として育って来た。君と共に野球をやり出したのは、この地方でははじめの頃だった。中下新川郡の小学生の野球大会に優勝して滑川中大さわぎをしたのは六年生の時でした。魚津中学では亦、同じ運動部で大いに活躍し早月川のハイキングでは、栗を取りに行って川原へすべり落ちたことや中学五年の時一緒に同人雑誌をつくって赤字を出し、君に迷惑をかけたことなど、悲しくも懐しい追憶は限りなけれど、既に君はなく、君は語らず、其の後、上京して医学を学ばれた君は、御尊父の御逝去と共に高島医院を継ぎ、いつも温い、いたわりをもって患者に接し、御尊父の時より以上の多くの患家に、心から頼られると共に、真実を求めてやまぬ君の心は、秀れた文才と相俟って、幾多の詩となり歌となって『北の貌』『山脈地帯』等の著書となり北方詩人としての君の真価は、早くから相馬御風先生の推賞となり、日本現代詩大系に於いても明らかであった。

殊に地方文化活動の重要な一面として、いつも君の詩や、随筆が新聞、ラジオ等で発表され、どれだけの人々が、君の指導、君の話に接することを、心の憩とし楽しみにして居た事であろう。

君がサインをして呉れた『北方の詩』が僕の手許にあるのが、君の何よりのかたみになってしまった。

高島君、四十二の時に写した写真が友人同志の最後の撮影であったのか、その時の君の挨拶の言葉が今でも耳の底に残って居る。

高島君、君は誠実そのものの様な人であった。常に君に学び、君の行にならって来た僕達は、今君の逝去にあって、一同の進路を失った思いがする。

然し今は全く無駄な、繰言に過ぎない。

君のなきあとには、立派に学位をとられた学君が居られる。何ら心にかかることもなく、安らかに眠りつかれたことと思う。今君の霊前にある友人一同もまた

陰ながら、必ず君の御遺族をお守りすることを約束します。

高島君、悲しみはつきない、これでお別れしよう。左様なら、心から君の御冥福を祈り、謹んで弔辞を捧げます。

昭和三十年五月十四日

（魚中同級生代表）

斉藤　一二

弔　詞

謹みて高志人会幹事故高島高君の英霊に申上ぐ。君が不幸病床に就かれてより、会員一同ひたすら御全快を祈りしも効なく不帰の客とならる。真に哀悼痛惜の極みなり。茲に御霊前に恭しく弔歌を捧げて御冥福を祈りまいる。

高志人の文の林を賑わせし
　君は逝きけりあわれ悲しき
高志の国御風に亜げる君なりと
　ふかき望みをかけたるものを
年若き君いたづきに在りながら
　世を諦めしこころをぞおもふ
ものされし北の貌などのよき詩も
　君を偲ばんかたみたるとは
君作せる希望の歌は末永く
　学びの児らに唱われ行かむ

（高志人会滑川支部代表）

坂田　嘉英

弔　詩

高島高先生
五月の爽かな正午
水のように流れていた電波が
不意に不気味な軋りで
私の耳に
先生の訃を知らせました
有り得べからざることが
不意に有り得たことの
非情の事実
理解せねばならぬ刹那の混迷が
私をもどかしくさせました
その夜
私は先生と過ごしました
大いなる詩魂は
不滅の光茫を放って
先生の肉体は亡び
雲は飽くまで黒く空を閉ざし
僅に残された幾つかの星だけが
天涯の一角より
先生の死を凝視しておりました
その中で
北の貌の海は
角度の向うで
暗く壁画のように唖黙り
不安げな眉を寄せ合っていました
先生
水橋口駅の柱時計の針は
先生の詩の中で曲っていた儘の曲り方で
今も曲っております
北の貌の町
北方の詩の町滑川は
先生の詩と共に生き
先生は既に在りません
先生
先生に師事して最も古く
御期待を裏切ること最も早かった私は
愚かしくも今
万酌（ばんこく）の敬慕と慙愧に胞を裂かれつつ
御霊前に
拙い詩を捧げました
何事をもお許しになった先生の
御恩寵に慣れて

遂に懶惰の淵に身を沈め果てた私をも大慈無倦の先生
はやはり許されるというのでしょうか
念わくば先生の変らぬ
御恩情に代えて
百千の鞭を賜らんことを

神保　恵介

弔　詩

先生は口ぐせにおっしゃっていました
一行の詩のために
百行の生活を　と
わたくしに詩はなく
一行の生活すらありはしない
けれど、
あ　あ
越中の小さな街の片隅で人力車の上に
星の詩心を燃やし尽くされた先生
先生を偲ぶことは
詩を惟(おも)うことです
夕ぐれ
橋場からのぞむ街の灯が涙に濡れて滲むとき
先生の少年の日の悲願がわたくしの胸にもかなしく強く
燃えてくるのです

（スバルの会）

ISBN978-4-905345-53-4

別冊
焔のように生命燃やした詩人　高島　高

二〇一三年九月三〇日

一～四巻＋別冊（分売不可）
定価　四〇〇〇円＋税（セット価）
編集　立野幸雄
発行　高嶋修太郎
〒九三六―〇〇六八　滑川市加島町八六六
発売　桂書房
〒九三〇―〇一〇三　富山市北代三六八三―一一
電話　〇七六―四三四―四六〇〇
ＦＡＸ　〇七六―四三四―四六一七
印刷　株式会社　すがの印刷